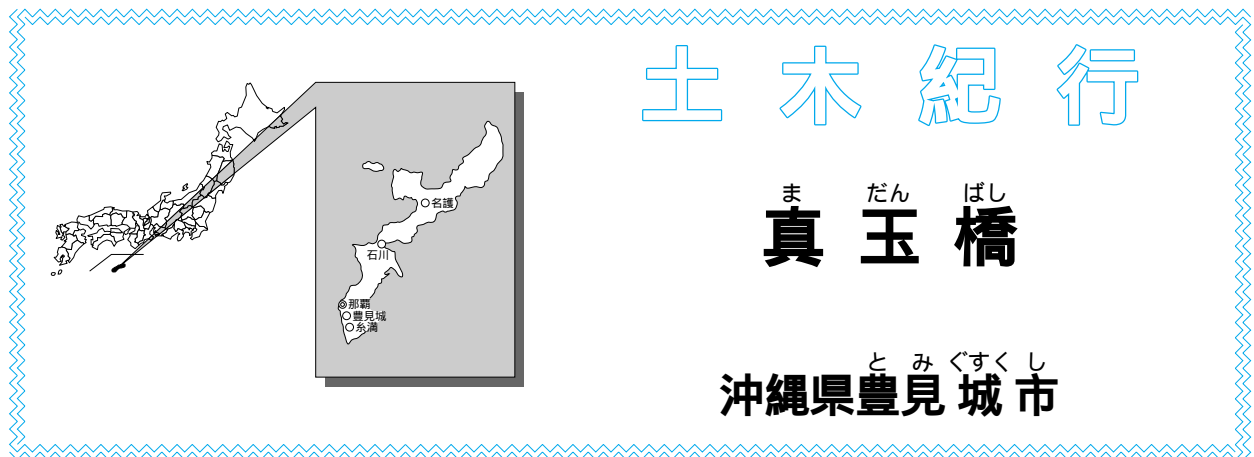




王国時代の創建

真玉橋は、那覇市と豊見城市との境を流れる国場川に架かり、那覇と南部地域とを結ぶ要路として、今も昔も人々の暮らしに密着してきた重要な橋である。

その創建は約500年前に遡る。1522年に尚真王の時代に架けられたのが最初で、外敵が侵入する事態に備え、首里城から那覇港南岸に築造された防御城砦に兵を急派するための軍用道路に架かる橋としてのものであった。

当初は木橋5座の造りで、真ん中を「真玉橋」、その北（那覇側）を「世寄橋^{よせばし}」、南（豊見城側）が「世持橋^{よもちばし}」、両端は無名であったといわれ、当時から橋全体を総称し真玉橋と呼んでいたようである。

1708年には石造橋に改修されたが、1809年大雨による川の氾濫で北側の世寄橋が壊された。橋の手前で川が弧を描くようにカーブすることで水圧が過重にかかったためだといわれている。そこで世寄橋のアーチを広くするなどして、その北側に新たに「世濟橋^{せいさいばし}」を設け対処したのが1836年に行われた重修工事である。その時の工事の状況を伝える記念碑として建立（1837年）されたのが「重修真玉橋碑文^{ちゅうしゅうまたまはしひぶん}」である。碑には改修工事に至った経緯や掛かった経費、石工人夫の数などが刻まれており、王国挙げての一大工事であったことがうかがえる。

重修工事にまつわる人柱伝説

真玉橋には「人柱」伝説があり、地元では「七色元結伝説^{なないろむすび}」の名で長い歴史をもつ橋の“周辺”

に花を添えている。「真玉橋由来記」という芝居にもなっており、年配の県民層には馴染みの演目で知られる。

『豊見城村史（1964年刊）』から話を要約すると、「橋は長大なため工事が難航、豪雨の度に築いた橋脚が壊される。そこに一人の巫女が現れ『橋が出来ないのは工事が大きいことと天候に恵まれないためであるが洪水の害は橋に人柱を立てれば免れる』と告げた。人柱となる者は子年生れの髪に七色の元結をした人だということで、その条件に合った人を方々探すが見当たらない。こころみにその巫女を調べてみたところ、条件にぴったりだったので巫女を人柱にし永遠に真玉橋の守り神にした」という話である。昭和10年に本土の『長良川の人柱』をもとに作られた話だとされているが、長い難工事で恐らくは犠牲者も出たであろう当時の厳しい状況が伝説を生む背景となり今に語り継がれている。

伊東博士の絶賛—琉球石造建築を代表する橋

重修工事を終えた真玉橋は、琉球の石造建築を代表する橋となった。美しい曲線のアーチが連なり、橋脚部の一部には川の水圧を緩めるため「潮切^{しおきり}」と呼ばれる構造が採用され景観的にも琉球随一の名橋と謳われた。その規模は石橋の長さ60間（約110m）、幅は16尺（約4.8m）であったと記録されている。

日本建築史学の祖・工学博士の伊東忠太（1867～1954）が、大正13年に沖縄を訪れた際、真玉橋を見て「上に質素な欄干をつけただけで装飾は全くないが、その線の運用だけでも技巧を表した限



写真—1 戦前の真玉橋（早稲田大学所蔵 田辺泰著作『琉球建築大観』より）



写真—2 橋梁工事の際に出土した石橋遺構（1996年）



写真—3 復元された真玉橋遺構



写真—4 現在の真玉橋

りない妙味がある。橋の長さ広さ高さの比例が適当で三拱（^{さんきょう}三つのアーチ）の形は半円に近くやや扁平（^{へんぺい}）に近いがその線が美しく力がある。外貌の秀美と内容の力の美とを兼備するもの」と絶賛した。伊東博士のこの賛辞は、今もかつての真玉橋を評価する際に常に引用されている。

戦災・復興の歴史—1996年の橋梁工事中に遺構出現

1945年、約90日間続いた沖縄戦で真玉橋もかつての姿を失った。記録によれば橋は米軍の侵攻を阻むため日本軍の手により爆破されたとあるが、両軍の「鉄の暴風」に（^{さら}）晒されたことは間違いのない。この戦場で橋のたもとの「重修真玉橋碑文」は碑身もろとも粉碎され、現在その残欠が市歴史資料展示室に市指定文化財として保存されている。また、碑文は地元の真玉橋自治会によって復元され（1980年）、かつての橋建設の偉業を今も讃え続けている。

戦後は、破壊された橋に代わって、まずドラム缶の浮き橋が米軍により敷設された。しばらくして鉄橋に生まれ変わる。1963年には琉球政府がコンクリート橋に架けかえ、その後老朽化や交通量の増加に対応するため鉄橋から数えて戦後3代目

となる新たな橋の建設計画が持ち上がる。1996年、真玉橋橋梁整備の工事現場で実施された遺構の発掘調査中に石橋のアーチや橋床の一部が出土、それも南北両方の橋のたもと部分から現れた。戦争で破壊され写真でしか見ることはできなかった真玉橋の出現は、遺構の一部とはいえ県民を驚かせた。

名橋復元へ

遺構を後世に残そうという世論がたちまち湧いた。地元では「現

地保存推進協議会」が発足、署名や要請活動、シンポジウム開催などが展開された。文化財保護審議会も保存が望ましいとの答申を出し、教育委員会も答申内容の実現を関係機関に要請、保存の機運が高まっていった。そうした中、学識経験者等で構成する遺構検討委員会が組織され保存方法を議論した結果、遺構の一部は埋戻し保存、一部を移設保存という方針を打ち出し、事業者側もその意見を尊重し保存されることが遂に決定され、那覇側（1遺構）、豊見城側（2遺構）それぞれの橋梁敷地内の一角に移設復元されることとなったのである。

琉球の石造技術の粋を集め建造された真玉橋は再び現代に（^{よみがえ}）甦った。文献等で5連の石造アーチ橋と紹介されるが、以前から別のアーチの存在も証言されていた。今回の工事と発掘調査でそれらが裏付けられる結果となった。

新しい真玉橋は2002年に完成、橋長は79.6m、幅員は歩道部分を含め30mで車道4車線の規模を擁し、その外観は石橋時代を彷彿とさせるデザインが採用されている。復元された真玉橋遺構（市有形文化財指定（1995年））に見守られ、人々の暮らしを昔と変わらず支え続けている。